

## 序論

白居易は官能の詩人である。また、「物のあはれ」を知る「多情の人」であった。本書を「恋情文学論」と名付けるのは、白居易の「多情」な本質が、「恋、愛」をめぐる文学に最も顕著に現れていると考ええるからである。

本書にいう「恋情」とは、「異性を恋い慕う感情」のことである。また「恋」の語も、「異性を恋い慕う」意味に限定して用いる。むろん「同性に対する恋(情)」というものも存在するのではあろう。白居易の場合でも、親友元稹への「友情」を詠じたときされる詩の中には、むしろ「恋情」の語を冠したくなるような作品が含まれている。さらに、一般的には、家族や故郷に対する「思慕の情」を、「恋」や「恋情」の語を以て表現する場合もあり得た。例えば、早期の用例である王粲の「從軍詩」(『文選』卷二七)には、「征夫親戚を懐ふ、誰か能く恋情無からん」と詠じられているが、ここで「恋情」の対象となっている「親戚」の内には、むろん男女の双方が含まれていたに相違ない。また、その感情は、一般的な「思慕の情」と解するのがよく、「異性を恋い慕う情」とは、やはり異質なものであろう。このように、本来「恋(情)」の対象や感情は幅広いのではあるが、本書においては、それを「異性を恋い慕う感情」の意味に限定して用いた。それは、一つには、論旨の鮮明化を顧慮しての措置であり、また、「異性を恋い慕う感情」が、人間存在にとって「最も根源的な感情の一つ」であると判断されるからである。

次に、「恋愛」という用語も、本書において多用されている。筆者はこの語を「男女が互いに恋い慕うこと」

の意味として用いた。念のため先の「恋情」との相違を述べておけば、「恋情」の語が、主に「感情（の働き）」に着目した用語であるのに対し、「恋愛」の語は、「行為」や「現象」の側面に重きを置いた術語として用いている。周知のように、「恋」と「愛」との混成語であるこの言葉は、西洋の「LOVE」の訳語として明治期に創作された「新造語」であった。したがって、これを安易に古典文学に援用するのは軽率であるとの批判もあり得よう。しかし、「男女が互いに恋い慕う」という「行為」それ自体は、太古からの連綿たる営為なのであり、洋の東西を問わぬ、人間に普遍的な「現象」なのであった。その意味で、そうした「行為」や「現象」を、近代の用語を借りて「恋愛」と称したとしても、学術研究の許容範囲を逸脱することにはならないであろう。こうした判断から、本書においては、「恋愛」という用語を——古今東西を一貫してきた——「男女の恋（特にその営為や現れ）」を意味する術語として用いることとする。

唐代、それも白居易の生きた中唐に至るまでの中国文学は、『詩経』や南朝の樂府を除けば、おおむね「恋情の率直な表出」や「恋愛行為の描写」を、「俗なるもの」として否定してきた。そうした、いわば偏頗な伝統に、「人情の自然」という観点から根本的な変革を促したのが、中唐の「恋情」文学であり、就中、白居易の文学なのであった。それを最もよく象徴する作品が、「長恨歌」であったと、筆者は考えるものである。

玄宗と楊貴妃の悲恋を詠じた「長恨歌」は、中国恋愛詩の代表作として名高いが、私見によれば、それは「多情な官能の詩人」という白居易の資質をまっぴら、はじめて生まれ得た傑作であった。その「長恨歌」は、瞬く間に一世を風靡し、やがて海を越え、日本へと将来された。平安朝の貴族たちは男女ともに「歌」を、そして『白氏文集』そのものを愛好し、結果、白居易の文学は、漢文学（男手）のみならず『源氏物語』を筆頭とする仮名文学（女手）の世界にまで、多大な影響を及ぼしたのであった。これは周知の事実であろう。一方、「長恨歌」は、中国においても、様々な後継作を生んだ。元・白樸の『梧桐雨』や清・洪昇の『長生殿』はその代表である。ま

た、『白氏文集』全体も、同じく、後世の各時代に熱心な愛好者を持ち、その時代の詩風や詩論に、大きな影響を与え続けてきた。

こうした諸事実から帰納できることは、白居易の文学には、読む者に時空を越えて共感を抱かせる、「普遍的な魅力」がある、ということであろう。その「普遍的な魅力」とは何かを明らかにし、それを生み出した要因を説明することが、本書の第一の目的である。

本書の第二の目的は、「長恨歌」の大流行を可能にした、中唐の価値観や美意識を明らかにすることである。作品と読者との間に「共感」が生まれるためには、「作品が内包する魅力」と同時に、読者の側にも、それを享受し得るだけの「成熟」が必要であろう。作品の魅力と享受者の成熟とが、同一の価値観や美意識の上で結ばれた時に、より深い次元での「共感」が生まれ得るのだと推定されるからである。「長恨歌」が中唐に大流行をみた背景には、このような、作品と享受者との「共鳴＝共感」の現象が、不可欠な要因として作用していたものと思われる。

本書の第三の目的は、「長恨歌」に代表される中唐の恋情文学が、その後の中国文学史に与えた影響を、明らかにすることである。内藤湖南（一八六六～一九三四）が、唐と宋の期間を、中国史の分水嶺と規定して以来、「唐宋変革論」は、文学研究においても、一つの大きなテーマとなっている。その「変革」の胎動は中唐に始まったとするのが、今日、文学研究者のほぼ一致した見方であろう。「恋情」文学の視座から文学史を展望した場合にも、白居易を中心とする中唐の恋情文学が、その後の中国文学に与えた、本質的な影響を確認することができる。本書の後半では、その点をも論証したいと考えている。

言うまでもないことだが、文学研究の方法や対象は様々である。しかし、筆者が一貫して興味を抱いたテーマは、作品の主題であり、詩人の本質であった。これが研究者として相応しい姿勢なのか否か、諸賢の判断は一樣

ではないのかもしれない。少なくとも筆者にとつて、それは「作品」や「詩人」の深部へと、作品との対話を通して、ひたすらに潜行してゆく営為と感ぜられた。しかし、その「潜行」が、一方で、視野の「拡大」とも連動していたとすれば、「井底の蛙」の弊害は、幾ばくかでも免れることができるであろう。本書は、そうした筆者の「管見」を以て、白居易とその文学全体に一貫する本質、及び、その文学史における価値を展望しようとした、「蝸螂が斧」的な試みである。しかしそれは、究極的には、誰しにも加せられた「限界」でもであろう。その思いに鼓舞されて、敢えて白居易の本質を述べれば、筆者には「多情な官能の詩人」と推定されたのである。

白居易は、花を愛で、酒を嗜み、女性を愛した。音楽も美食も睡眠も好きであった。いわば「五官(感)」の全てを使って「生」を謳歌した詩人であった。一方で彼には、「身体」と「感情」とは同根にして一体のものである、との確信があった。「感」情は、『毛詩(詩経)』大序が述べるように、全ての詩作の源泉である。白居易は、その「感情」に誰よりも恵まれた「多情な」詩人であった。この「多情さ」と「情の根源性に対する認識の深さ」こそが、白居易文学の本質——少なくともその重要な一面——なのである。彼の内なる「情」は、認識と実感の双方において、彼の「身体」と殊のほか密接に連関していた。この「情」と「身体」との「密着の強さ」こそが、「身心の(快)適」を生涯希求し続けた「官能の詩人」としての特質を決定づけたのである。筆者はこうした考えに基づいて、白居易を「多情な官能の詩人」と規定した。もちろんそれは、諷諭・閑適・感傷の類別を一貫する「白詩の特質」として顕現している。中でも、それが最も顕著に発揮された分野の一つが、恋愛詩であったと思しい。本書が主要な考察の対象とした「長恨歌」こそは、そうした白居易の特質が、遺憾なく発揮された恋愛詩の最高傑作であろう。筆者は、詩人白居易の本質を、概ね以上のように捉えている。

こうした筆者の白居易観に対しては、「恋情や恋愛に偏向した特殊な認識にすぎない」との批判も、当然あり得るであろう。しかし、白居易の本質を「詩人」と捉えるならば、「詩は情の発露である」という認識自体は極めて「平凡なもの」であり、「詩人」白居易の本質は、そうした「平凡なる真実」に支えられていた、というのが、筆者の基本認識なのである。

例えば、元和四年(八〇九)十月、左拾遺であった白居易は、宦官を軍の総帥に任命せんとした憲宗に面と向かって「陛下誤てり」と直言し、皇帝の顔色を変えさせた(『新唐書』本伝)。国家(公)のために、(中央官僚としての)個の生存を賭してまで諫言したその正義感、中国士大夫の純良なる伝統の発現であり、確かに白居易が自己の恋情や恋愛に埋没する体ていの「個人主義者」ではなかったことを明証している。しかし、この諫官としての「情熱」と「正義感」の来源をさらに深く遡求したならば、究極的には、白居易の「詩人としての誠実さ」に逢着するはずであり、「新楽府」等の諷諭詩も、そうした「誠実さ」を母胎として詠出されたものであったに相違ないのである。その「誠実さ」を支えた根本こそは、「詩は情の発露である」という、白氏の「平凡なる」認識と実感であり、それこそが、類い希なる平衡感覚に恵まれた「詩人」白居易の「原点」なのであった。

『元九に与ふる書(与元九書)』が明言するように、白居易にとって「情」とは、「個人の感情」を越えて「普遍の人情」へと通じるものであった。「人情の普遍」とは、「人情の自然」とほぼ同質の認識であり、これが、白居易の「身心の(快)適」を希求する態度を根底で支え、また一方においては、「恋情」や「恋愛」に対する肯定的な態度を支えてもいた。敢えて簡略化すれば、「情の普遍性」が諷諭詩を、「情の身体性」が閑適詩を、「情の根源性」が恋愛詩(感傷詩)を、支えていたと言えるであろう。すなわち、諷諭詩や閑適詩や恋愛詩といった、白居易の「個性的で特殊な」文学は、何れも「詩は情の発露である」という「平凡なる」認識と実感とに支えられていたのである。「平凡なことの方が非凡なことよりもよほど非凡なのだ」とG・K・チェスタトンも述べているが(『正統とは何か』)、それは恐らく、真実なのである。

「恋愛」や「恋情」というものは、そうした「平凡なるもの」として、古今東西の文化に遍く存在し続けてき

た。「人為」を重んずる中国の儒家思想が、「恋情」を「俗情」として捉え、その詠出や表現を殊更に抑制してきた背景にも、そうした——恋情は自然であり、俗であるという——前提が、暗黙の内に作用していたものと推定される。しかし、それだけに却って、「恋情」は、中国の文化や詩人の本質を究明するうえで、極めて重要な視点になり得る、というのが、筆者の判断なのである。

本書を『白居易恋情文学論』と名付けた背景には、おおよそ以上のような認識が潜在している。こうした考え方が、正鵠を射たものであるか否か、それは、本書を一読いただいた諸賢の判断に委ねるほかはない。筆者としては、ただ本書が、従来の白居易研究にとってなにかしな意味のある、新たな知見を提供し得ていることを願うばかりである。